

キャンパスを歩き、街を訪ねる。

そこには先端の研究があり、歴史がある。

今回はキャンパス東端に新設された生命科学総合研究棟を訪ね、正門前の高崎屋商店を覗く。

寒風吹きすさぶ 実験室から 近代建築の研究棟へ

生命科学総合研究棟

「ここを卒業したのはもう30年以上も前のことです」。農学部2号館の正面玄関に立った西川教授は目を細めて太田教授にそう話しかけた。二人は同じ農芸化学科に学び、応用微生物研究所の先輩と後輩にあたる。西川教授は68年、太田教授は71年の卒業だが、大学紛争のあおりで二人とも卒業式はなかったという。

「あの頃の実験室といえば、冬は寒風吹きすさび、夏は蒸し風呂状態でした」と西川教授は笑う。暑を避けて夕方から実験を始め、深夜に及ぶことも多かった。真夜中には皆で盃を交わした。銘柄はサントリーレッド。それを聞いて太田教授が応えた。「あのボトルにはちょうどいい波線があって、実験用の容器としても重宝しました」。

教授たちはそこからキャンパス東端の生命科学総合研究棟へと足を向ける。

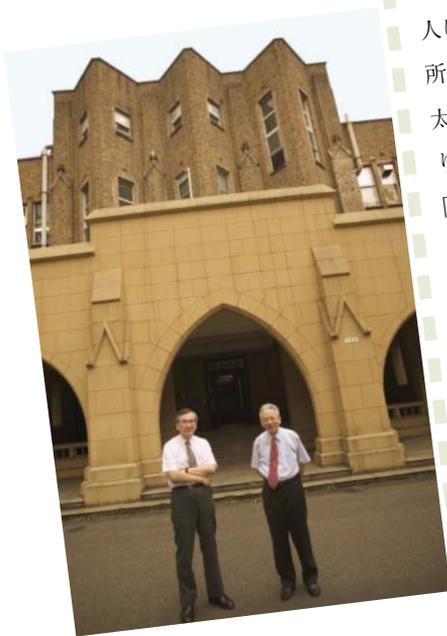
二人が在籍した応用微生物研究所は93年に分子細胞生物学研究所と改称され、いくつかの研究室が新設された。この研究棟の目的のひとつが同研究所の研究活動だ。

「昔は大腸菌や枯草菌などの細菌がモデル生物として研究の主体でしたが、いまは酵母、培養細胞や個体としての動物がメインになってきています」と太田教授は説明する。分子生物学の進展やゲノムプロジェクトの流れを背景に細胞

の構成分子についての総合的研究の必要性が高まっているのだ。

研究棟の屋上に上がると昔の学生寮の跡地が見える。豊かな緑が風に揺れている。木立の間に西川教授の家の屋根がのぞく。それを眺めながら教授が静かに言った。「私の家はもう90年近くもここにありますが、大学から迷惑を被ったこともありましたが、よい環境を享受していません。閑静で、緑も多い。同じように感じている住人は他にもたくさんいるでしょう。ですから、研究を進めるうえで、地域も含めた環境の整備と安全性にどうか充分注意してください。そうした配慮があつてこそ、皆さんの研究成果が一層生きてくるのですから」。この言葉に太田教授はにこやかにうなずいた。

現在、生命科学総合研究棟には旧農芸化学科系の研究室が6つ、分子細胞生物学研究所の研究室が6つある。



東海大学工学部生命化学科

にし かわ よし ひさ
西川義尚 教授



東京大学大学院
農学生命科学研究科
細胞遺伝学研究室

おお た あき のり
太田明徳 教授